



# 宮崎大学

University of Miyazaki

～世界を視野に 地域から始めよう～

## 報道発表

令和4年1月6日

各報道機関 御中

宮崎大学企画総務部  
総務広報課長

### 宮崎大学のトピックス（12月分）の配信について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本学の教育・研究・社会貢献活動についてご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、本学は地域活性化の中核的役割を果たす大学として日々様々な活動を行っております。その活動の概要は、大学のウェブサイト上にトピックスとして掲載し、幅広く地域の皆様に見ていただけるようしているところです。

そのトピックスを月毎にまとめたものを報道機関の皆様にお配りし、大学の活動を知っていただくとともに、記事として取り上げていただき、より地域の皆様の目に届けたいと思っております。

つきましては、是非一読していただき、取材していただくようお願いいたします。取材にあたっての関係部署との調整・取り次ぎ等は総務広報課広報係にお申し付けください。

敬具

① 発信元

宮崎大学企画総務部総務広報課

TEL : 0985-58-7114 FAX : 0985-58-2886

## 宮崎大学最近のトピックス（令和3年12月分）

1. 学生企画による「テゲバジャーロ宮崎応援バスツアー」を開催
2. 公開講座「ミツバチの世界を知ろう」を実施
3. 木花キャンパス「ゆにのもり保育園」の開園式典を実施
4. 公開講座「“和合の郷”土呂久に学ぶ環境学2」を実施
5. 「九州地区 防災・減災シンポジウム in 宮崎 2021」をオンラインで開催
6. 教育学部尾之上准教授が日本教育心理学会優秀論文賞を受賞
7. パソコンセミナー「Windows パソコンの上手な使い方」を実施
8. 諸塚村長が高校生・大学生に講演
9. 大学生が母校・鹿児島県立曾於高等学校生に大学の魅力を紹介
10. 令和3年度宮崎大学自衛消防訓練を実施
11. 修学支援事業：食料品とマスクの詰め合わせを1,400人分配付
12. 「2021年農業技術10大ニュース」に「豚の体重が見えるめがね」
13. 「宮崎大学420単位時間日本語教員養成プログラム」が文部科学省の「職業実践力育成プログラム」(BP)に認定
14. 「みやざき地頭鶏（むね肉）」が機能性表示食品に

## 1. 学生企画による「テゲバジャーロ宮崎応援バスツアー」を開催

宮崎県初のプロサッカークラブ「テゲバジャーロ宮崎」と、地域資源創成学部 企業マネジメントコースの丹生昇隆研究室（技術経営・ベンチャー）は、連携して、「宮大×テゲバ交流イベント」を開催しました。第3回の交流イベントとなる今回は、宮崎大学の学生を対象とした「テゲバジャーロ宮崎応援バスツアー」を実施、令和3年11月14日（日）に、ユニリーバスタジアム新富で開催された「テゲバジャーロ宮崎 vs FC 岐阜」を観戦した。

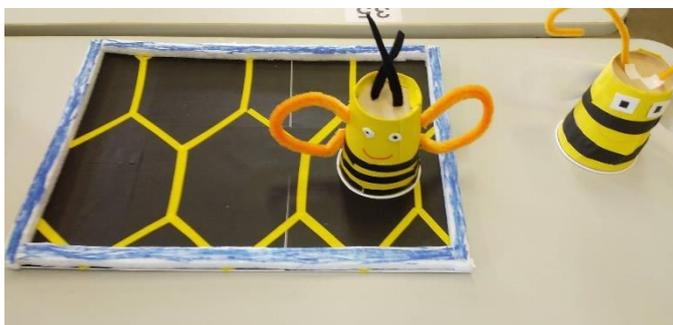


バスツアーの実施にあたっては、事前にスポーツツーリズム講座を開催し、地域におけるスポーツ資源について学びを深めるとともに、当日は「新富町スタディツアー」を行い、ホームタウンとしての新富町の取り組みについて理解を深めた。

バスツアーには、地域資源創成学部と工学部の計27名の学生が参加し、試合開始にあたっては、入場する選手をピッチ上で迎える「ウエルカムピッチサポーター」を体験し、選手をとて身近に感じることができる機会となった。試合は、ホームチームのゴール裏席から観戦し、大きな拍手で応援！結果は、4-3でテゲバジャーロ宮崎の勝利！今回、サッカー観戦が初めてという学生も多く、スタジアムでなければ得られない感動を共有することができた。

## 2. 公開講座「ミツバチの世界を知ろう」を実施

令和3年11月20日（土）、農学部木花フィールドセンターにて、小学生親子向けに公開講座「ミツバチの世界を知ろう～親子でつくるミツバチの世界～」を開催し、親子10組23名が参加した。



講座では、ミツバチの生態や食べもの、人間がミツバチから受ける恩恵、ミツバチの生きる環境などミツバチの世界について養蜂家が説明し、子ども達からはたくさんの質問が寄せられた。教室にはガラス張りの観察箱が用意され、ミツバチの巣箱内の様子や音、匂いなどを感じ、親子ともに興味津々で観察していた。各組には蜜ろうシートが配られ、巣のハニカム構造についても学んだ。

後半は用意された様々な材料を使い、親子で思い思いにミツバチの世界を表現する工作を行った。できあがった作品には、こども達の発想や創作力の豊かさが表れている。今後も木花フィールドでは、森林や環境に関わる様々な講座を実施していく。

### 3. 木花キャンパス「ゆにのもり保育園」の開園式典を実施

令和3年11月25日（木）、木花キャンパスにおいて、株式会社宮崎エレベータサービスが内閣府企業主導型保育助成事業により設置した「ゆにのもり保育園」の開園式典が執り行われた。

開園式典には、保育園の設置者である河野社長を始め、本学からは鮫島学長を含む多くの関係者が出席し、開園を祝った。

「ゆにのもり保育園」は、生後8週間から小学校就学の始期に達するまでの乳幼児

（0歳～未就学児）を対象としており、最大60名の定員のうち、共同利用契約締結により宮崎大学枠25名を設けている。

この保育園により、本学が、「誰もが学びやすい、働きやすい環境」となることが期待されている。



### 4. 公開講座「“和合の郷”土呂久に学ぶ環境学2」を実施

令和3年11月13日（土）、11月20日（土）、11月27日（土）と3回に分けて公開講座「“和合の郷”土呂久に学ぶ環境学2」を開催した。講師は元新聞記者で記録作家の川原一之氏が務め、まちなかキャンパスにて講義を行い、オンライン配信も含め、28名が受講した。

川原氏は、これまで長きにわたり、宮崎県西臼杵郡高千穂町岩戸の土呂久地区の旧土呂久鉱山で、亜ヒ酸を製造する「亜ヒ焼き」が行われたことを原因に発生した土呂久公害について追跡調査を行い、土呂久の歴史の



記録に尽力してきた。現在は土呂久公害の教訓を次世代に引き継ぐ取組をしている。

初回の講座は、初めて土呂久公害が報道されたとされている 1971 年 11 月 13 日付の西日本新聞の記事から、ちょうど 50 年となったという話題から始まり、実際にはその 2 年以上前から地元ローカル紙で報道されていたことも紹介された。

今回は土呂久で亜ヒ酸生産が始まった歴史を、それに関わったキーマン達を中心に紹介され、「佐伯」や“夢追い山弥”という伝承との繋がりが示された。

2 回目の講座では、まず 1925 年の鉱山周辺における牛馬の変死を扱った獣医の報告書が取り上げられた。続いて土呂久地区の住民自治組織であった和合会が、1941 年に土呂久鉱山での亜ヒ酸焼を中止に追い込むまでの過程が説明された。そしてこの二つの出来事の背景には、開発を推し進める国と被害を受ける地元住民の間に立ち、現実的な解決を模索した甲斐徳次郎岩戸村長の存在が示唆された。

3 回目の講座では、現在もアジアの各地から砒素汚染によって多くの患者が苦しんでいる現状から、土呂久の支援者が 1994 年 4 月「アジア砒素ネットワーク」を結成して、その経験を活かし、アジアの砒素汚染解決のための活動を始めた話があり、受講者からは「土呂久の運動がアジアへと広がりを見せていたことについて驚いた」等の声が聞かれた。

本学では、土呂久公害に関する唯一の資料室や展示スペースを大学内に設置している。

過去の教訓を後世につなげられるよう今後もこのような取組を推進していく。

## 5. 「九州地区 防災・減災シンポジウム in 宮崎 2021」をオンラインで開催

令和 3 年 11 月 27 日（土）、一般社団法人国立大学との共催で「九州地区 防災・減災シンポジウム in 宮崎 2021 ～ニューノーマルにおける防災・減災を考える～」をオンライン形式で開催した。

宮崎県をはじめとする九州地区では、地震や火山、豪雨等の自然災害が毎年のように発生している状況で、自然災害による人的・物的被害軽減は喫緊の課題となっていることから、本学では、平成 23 年度に大学院農学工学総合研究科に防災環境研究センターを設置した。

本シンポジウムは、同研究センターを中心に、防災・減災に関する最新の学術研究成果を地域社会に還元することを目的として開催したもので、まず、長崎大学名誉教授の高橋和雄氏が「豪雨災害の巨大化と防災・減災対策の再考」と題して講演を行った。

続いて、宮崎大学医学部附属病院感染制御部長の高城一郎氏が「新型コロナ時代の避難所に



おける注意すべき感染症と感染対策」と題して、熊本県山鹿地区薬剤師会理事の大森真樹氏が「熊本地震や令和2年7月豪雨の災害支援経験から学ぶ ～コロナ禍に知っておきたい公衆衛生などについて～」と題して講演を行った。

また、司会を MRT 宮崎放送アナウンサーの粉川真一氏が務め、異なる職種に就く3名の講師の視点を上手く引き出しながら、コロナ下における防災・減災への対応のあり方、公的機関や地域の取り組みの在り方、被災時の公衆衛生などについて、今後役に立つ有意義な意見交換も行われた。

本学では、研究成果を社会に還元する取り組みを推進しており、今回のシンポジウムは、公式 Youtube チャンネルにて公開している。

## 6. 教育学部尾之上准教授が日本教育心理学会優秀論文賞を受賞

教育学部教育臨床心理講座の尾之上高哉准教授が、日本教育心理学会優秀論文賞を受賞した。

当該年度の機関誌『教育心理学研究』に掲載された論文「ブロック練習と交互練習の単独効果と複合効果の比較検討—学習内容の定着度、及び、確信度判断の正確性に着目して—」(共著)が、同機関誌に発表された全論文のうち、特に優秀な論文として選出されたものである。論文の水準とその研究成果の教育への貢献度の高さが評価され、今回の受賞に至った。



## 7. パソコンセミナー「Windows パソコンの上手な使い方」を実施

令和3年12月3日(金)、情報基盤センターは附属図書館1階ワークショップコートにおいて『Windows パソコンの上手な使い方』と題して、昨年に引き続き特別セミナーを開催した。

本セミナーでは、情報基盤センターの松澤英之助教を講師として、コロナ禍を背景に授業や業務が急速に在宅で行



われるようになり、セキュリティの重要性・必要性が増す中、「パソコンとスマートフォンの違い」「パソコンのセキュリティ・日々のメンテナンス」等について丁寧な説明を行い、実際に持参したパソコンを用いて作業工程を確認した。

今年度は、学部生・大学院生だけでなく職員にも対象を広げ、情報セキュリティに対する意識向上やパソコンの知識向上を計った。

参加者からは、「基礎的な知識なので、解っていた部分もあったが、解らなかった部分が理解でき、断片的だった部分のパソコンやセキュリティの知識が繋がった」「これまで自動的に行われていると思っていたアップデートが行われていなかったの、帰ったら実施します」等の感想が聞かれ、充実したセミナーとなった。

今後も、情報基盤センターでは、学生や教職員に対する特別セミナーを定期的に企画・開催し、情報システム及び情報セキュリティに関する教育を展開することとしている。

## 8. 諸塚村長が高校生・大学生に講演

令和3年12月15日(水)、地域デザイン棟と創立330記念交流会館を拠点に「第33回宮崎TOPセミナー 諸塚村編」を開催した。

本セミナーは、2017年度から開催され、本年度が5年目。地域のポテンシャルを知り、地方自治を身近に感じて、宮崎の将来を考えてもらうきっかけをつくることを目的に開催しており、これまでに宮崎県内26市町村の首長32人が講演を行い、学生・教職



員のみならず、地域住民や高校生なども参加し、のべ2,300名以上が受講している。

本年度5回目となる今回は、西川 健(にしかわ けん) 諸塚村長が講師を務め、対面形式とZoomを利用したオンライン形式で実施し、大学関係者のほか、高校生、市民も含めて64名が受講した。

九州山地の中央に位置し、標高1,000mの山々に囲まれた諸塚村は、村土の95%が山林を占めていて、一つの品目の農産物を大規模に生産することが難しい条件下にあるものの、森林と共存しながら保全・活用し、木材・椎茸・畜産・お茶名などの複数の産品を複合的に生産している。その「山間地農林業複合システム」は、まさに現代に求められる持続可能なシステムであり、世界的にも高く評価され、2015年12月に世界農業遺産に認定されている。さらに、本システムはSDGsにつながる活動として、企業連携も活発で注目を浴びている。西川村長は、2015年5月から村長を務めていて、現在2期目。他の中山間地と同様に、人

口減少や少子高齢化などの喫緊の課題に直面するなか、1948年に発足した「諸塚方式」による自治公民館制度を引継ながら、住民の連携組織である「自治公民館連絡協議会」と行政機関などが車の両輪となる形で、約1,400人の村民の暮らしを守り続けていることなどが紹介された。

本学では、高千穂郷・椎葉山地域が世界農業遺産に認定される前から5町村（高千穂町、椎葉村、五ヶ瀬町、諸塚村、日之影町）について、宮崎県などとも連携しながら調査・研究を実施しており、2017年3月には、「宮崎大学」、「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会」および「宮崎県立高千穂高等学校」の三者間で連携協定を締結した。

世界農業遺産としての認定を受けた同地域の若い世代を対象としたプログラムを構築・実践することなど、教育・人材育成面での連携強化に加え、同地域が持つ資源の再評価・体系化などを学術的な視点で明らかにし、地域活性化につなげていくことを目指して、農学部や地域資源創成学部教員を中心に研究を進めており、今後も同地域の価値を学術的に明らかにするとともに、出前講義の実施などを通して、若い世代が地域に自信と誇りを持てるように教育・人材育成面でも寄与していくこととしている。

## 9. 大学生が母校・鹿児島県立曾於高等学校生に大学の魅力を紹介

令和3年12月16日（木）、鹿児島県立曾於高等学校の1年生19名が宮崎大学を訪問した。

当日は、はじめに今月14日に公開されたばかりの東進TVの宮崎大学紹介映像の視聴による大学全体の説明があり、農学部森林緑地環境科学科の櫻井倫准教授が映像や写真を交えながら研究紹介を行った。



続いて、櫻井准教授の研究室に所属し同校の卒業生である久木山弘忠さん（農学部森林緑地環境科学科4年）と同じく卒業生の宮田千穂さん（教育学部2年）、木原啓太さん（地域資源創成学部2年）の3名が座談会形式で高校生に大学の魅力を紹介した。

3名は、高校と大学の違いや大学での過ごし方、コロナ禍におけるリモート授業の経験、アルバイトやサークル活動のことなどを交えてわかりやすく大学生活について紹介し、高校生からは「学食のおすすめは何ですか？」「高校生のうちにどんな勉強をしていたらいいですか？」などたくさんの質問があった。

高校生は学生食堂で昼食を楽しんだ後、キャンパスを自由散策して附属図書館や地域デザイン棟などを見学し、高校とは異なる大学の雰囲気を楽しんだ。

本学では、コロナ下においても感染対策を徹底した上で積極的に大学訪問を受け入れている。また、高校生が取り組む探究活動に対して、アドバイザー教員として大学教員を配置するなど、様々な形で高大連携を強化し、本県の高等教育の更なる充実に貢献している。

【宮崎大学】AI×農業・医学×獣医学！?分野を超えた学びに迫る！ 東進 TV 大学紹介  
[https://www.youtube.com/watch?v=qWN2VR5\\_9TM](https://www.youtube.com/watch?v=qWN2VR5_9TM)

## 10. 令和3年度宮崎大学自衛消防訓練を実施

令和3年12月16日(木)、本学の学生・教職員の防災意識の高揚を図るため、木花キャンパスにおいて自衛消防訓練を実施した。

当日は、雨天により当初の予定から一部を変更しての実施となったが、安否確認システムを使用した緊急連絡訓練、震度6強の地震が発生したことを想定したシェイクアウト訓練、火災発生を想定した自衛消防訓練が行われた。



創立330記念交流会館では心肺蘇生およびAED講習も行われ、教職員のほか学生も参加した。

参加者は、避難経路の確認や実際に屋内消火栓の操作を行うといった様々な体験型の訓練を通じて、防災の重要性を改めて認識し、充実した訓練となった。

本学では、今後も定期的に訓練等を実施し、防災意識向上を図ることにしている。

## 11. 修学支援事業：食料品とマスクの詰め合わせを1,400人分配付

令和3年12月17日(金)、本学に在籍する学生を対象とした修学支援事業の一環として、食料品とマスクの詰め合わせセットを1,400人分配付した。

本企画は、コロナ下における学生の生活面での不安を少しでも取り除いてもらうことを目的に、修学支援事業基金(学外者及び教職員からの寄附金)に加え、(1)宮崎県生活協同組合連合会、(2)宮崎大学生活協同組合、(3)宮崎県農協果汁株式会社、(4)株式会社エコープみやざきからのご厚意による支援で実現したもので、今回が2回目となる。(1回目は令和3年7月2日)

配布物の中身は、レトルトご飯 3 食分、インスタントうどん、インスタント味噌汁、果物の缶詰、レトルトカレー、パスタ麺・ソース、ブレンドスティック、日向夏ジュース、マスク等と約 2,500 円分相当が入っていて、春日圭太さん(工学研究科 1 年)は「思ったよりもたくさん入っていた。今回はパスタやお米なども入っていてとても嬉しい」、木村明愉さん(工学部 3 年)



は「友人でもアルバイト収入などが減っている人が多く、このような支援は私たち学生にとってとても助かります」とコメントを寄せた。

本学では、定期的に 100 円弁当(毎回 1,000 食~1,200 食)を提供しているなど、今後もいただいた多く支援を適切に活用し、学生が充実して楽しい大学生活が送れるように取り組んでいく。

## 12. 「2021 年農業技術 10 大ニュース」に「豚の体重が見えるめがね」

令和 3 年 12 月 23 日(木)に公表された農林水産省の「2021 年農業技術 10 大ニュース」に、本学工学部川末紀功仁教授を中心とする研究グループが AI(人工知能)と AR(拡張現実)技術を駆使して開発した「豚の体重」を瞬時に可視化する装置である「豚の体重が見えるめがね」が選定された。



この装置は、両手がフリーな状態で使用できるので、豚の体重を見ると同時に他の作業に従事できるため、養豚業における作業を効率化させ、今後の養豚業のあり方を大きく変

える可能性を秘めている。

### 13. 「宮崎大学 420 単位時間日本語教員養成プログラム」が文部科学省の「職業実践力育成プログラム」(BP) に認定

国際連携センターが開講している宮崎大学履修証明プログラム「宮崎大学 420 単位時間日本語教員養成プログラム」が文部科学省による令和 3 年度「職業実践力育成プログラム」(BP) の認定を受けた。

「宮崎大学 420 単位時間日本語教員養成プログラム」は、日本語教員を目指す人のための本格的な養成講座



で、高校卒業以上の方なら誰でも受講できる、社会に開かれた、宮崎県で唯一の、また国立大学として唯一の文化庁届出受理の日本語教員養成研修である。

BP 制度は、大学等におけるプログラムの受講を通じて、社会人の職業に必要な能力の向上を図ることを目的として、社会人や企業等のニーズに応じた実践的・専門的なプログラムを文部科学大臣が認定するもので、宮崎大学では初の認定となり、日本語教員養成研修の BP 認定としても初であると思われる。

また、BP のテーマ別では「地方創生 (地域活性化)」のテーマで認定されており、本プログラムが宮崎県において急増する在住外国人への日本語支援の充実といった地域の課題解決に寄与する取り組みである点が評価された。

2019 年 8 月から開講されている本プログラムでは、すでに多数の修了生を輩出しており、修了生は日本語教育人材として在住外国人への日本語教育・支援、異文化接触、多文化共生等に携わりながら国内外で活躍することが期待される。

本学は、今後も国際化・多様化していく地域社会に貢献する取り組みを行っていく。

### 14. 「みやざき地頭鶏 (むね肉)」が機能性表示食品に

イミダゾールジペプチドを含有する「みやざき地頭鶏 (むね肉)」が、「日常生活の一時的な疲労感を軽減する機能」があるとして機能性表示食品となった。イミダゾールジペプチドは、カルノシン、アンセリン、バレニンの 3 種がよく知られ、トリむね肉にはカルノシン、アンセリンが多く含まれ、鯨肉などにはバ



レニンが含まれている。これらは、ヒスチジンとβ—アラニンという二つのアミノ酸が結合したペプチドといわれる物質となり、食肉や魚肉に多く含まれる機能性成分の一つである。渡り鳥や回遊魚は長時間連続して運動できるが、その骨格筋に多く含まれており、そのため、抗疲労効果や認知症予防などで最近注目されている成分である。

「みやざき地頭鶏（むね肉）」に含まれる機能性関与成分であるイミダゾールジペプチドの含有量等について、農学部応用生物科学科 榊原陽一教授 や宮崎県の協力のもと、みやざき地頭鶏事業協同組合において調査を行い、イミダゾールジペプチドの含有量について分析し、生産者、雌雄別、飼育の季節などの影響を受けず、基準値以上の含有量を示すことを確認した。

今回の認定は、その成果による消費者庁への届出が令和3年9月に受理されたものである。生鮮食品が機能性表示食品となるのは本県では初であり、地鶏肉（生鮮食品）における機能性関与成分であるイミダゾールジペプチドについて「日常生活の一時的な疲労感を軽減」と表示されるのは九州初である。

「みやざき地頭鶏（むね肉）」は、令和4年1月上旬より株式会社地頭鶏ランド日南、J A日向で販売を行う予定。

本学は、今後も研究成果を広く社会へ還元していけるよう取り組んでいく。

#### 機能性表示の内容

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| (1) 商品名      | みやざき地頭鶏（むね肉）    |
| (2) 機能性関与成分名 | イミダゾールジペプチド     |
| (3) 表示する機能性  | 日常生活の一時的な疲労感を軽減 |
| (4) 届出者      | みやざき地頭鶏事業協同組合   |
| (5) 受理日      | 令和3年9月29日       |